

# 塩谷郡市医師会だより

## Contents

- 1 第8回市民公開講座
- 2 第2回役員会報告
- 3 学術講演会報告
- 4 シリーズ「塩谷医療史」12

一般社団法人 塩谷郡市医師会  
広報委員会

〒329-1312

さくら市桜野1319番地3

さくら市氏家保健センター内

TEL 028(682)3518

FAX 028(682)5760

## 市民公開講座開催される



今年の市民公開講座は10月28日(日)塩谷町の塩谷中学校アリーナで行われた。テーマは東日本大震災によって生じた原発事故から1年半余り過ぎても出口の見えない放射線被ばく問題を取り上げた。関心の高いテーマであったため、生憎の雨と硬い内容にも関わらず、300名の参加者があった。また、今回の公開講座は放射能被曝に対して人により考え方が大きく異なることから、事前に塩谷町の中学校、小学校、保育園の保護者にアンケートをとり、特に子育て世代の市民の方々の不安や要望、知りたいことを踏まえて講演会に臨んだ。

講演の一部は前塩谷中学校PTA会長で歯科医師でもある和田賢一氏の「塩谷中学校の放射線量測定を実施してわかったこと」と除染実施計画対象地域の住民である金澤亨彦氏による「食物や身の回りで接するものの放射能を測定してわかったこと」で、大変興味深い報告であった。

続く基調講演は福島県医療生協わたり病院内科医師の斎藤紀氏の「福島第一原発事故から1年7か月が過ぎて～低線量被曝をどうみるか～」であった。斎藤先生は福島県立医科大学卒業後、広島大学原爆放射能医学研究所に勤務後、福島県福島市で診療にあたられており、偏らない立場から低線量被曝や今後の我々の

暮らしについて話してくれ、大変わかりやすく為になる講演であった。

## 平成24年度第2回役員会報告

平成24年9月24日(月)午後7時からさくら市氏家保健センター医師会事務室で開催された。

出席者：山田会長・尾形副会長・岡副会長・池田  
軽部・佐野・大草・半田・谷口・越井・高橋・植木  
手塚・小島・江口



## 第1号議案 市民公開講座について

10月28日に行われる市民公開講座のスケジュール、進捗状況等が報告された。

## 第2号議案 病診連携の対応とアンケート結果について

同意のあった医療機関情報を病診連携に役立てるために二次医療機関に提供することになった。

## 第3号議案 学校医処遇改善の要望について

県内の学校医は地区により、報酬額が異なり、また眼科や耳鼻科校医の配置も偏りがみられる。この状況に対し県医師会学校保健部会が平成23年10月に各市町教育委員会に学校医処遇改善の要望書を提出した。特に塩谷地区は近隣の地区に比較し学校医報酬が低い傾向があった。本医師会としても各市町の教育委員会に同様の要望書を提出することになった。

編注：本要望書や各医師団の働きかけにより、平成25年度から塩谷地区の学校医報酬の値上げが行われ

| 塩谷郡市医師会ホームページ/メール                                                                                                                                                         | 広報委員会編集部                                                                                                                                      | 医師会事務局                                                   |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| URL <a href="http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/">http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/</a><br>メール <a href="mailto:shioya@tochigi-med.or.jp">shioya@tochigi-med.or.jp</a> | 岡 一雄 <a href="mailto:r2d2@msh.biglobe.ne.jp">r2d2@msh.biglobe.ne.jp</a><br>尾形新一郎 <a href="mailto:ogata@o-ga-ta.or.jp">ogata@o-ga-ta.or.jp</a> | 糸川 kumekawa.shioya@gmail.com<br>高橋 takahashi@e-shioya.jp |

る見込みである。

#### 第4号議案 平成25年1月学術講演会と新年会について

7月に行われた納涼会と同様に、1月の新年会も講演会と組み合わせて行うことになった。

#### 第5号議案 その他

平成25年秋に矢板市で行われる予定の市民公開講座について「メンタルヘルス」をテーマに行う予定であることが公表された。

#### 学術講演会Ⅰ

##### 「乳幼児期のワクチン 最近の話題」

日時：平成24年9月25日(火)

講師：千葉大学医学部附属病院 感染症管理

治療部 講師 石和田 稔彦先生

最近欧米とのワクチンギャップが問題視されてから国のワクチンの認可がどんどん進んでいる。Hib、小児肺炎球菌、ロタに続き、9月から不活化ポリオ、11月からはDPTと不活化ポリオの4混が始まる。われわれ開業医は新しいワクチンについてどんどん学ばなければついていけないような状況になっている。こんな中、非常にタイムリーな講演会が開かれた。今回は医師だけでなく、2市2町の行政の職員や保健師も参加した講演会であった。

講師の石和田先生は、乳幼児期のワクチンの専門家で、今回から始まる不活化ポリオワクチンについては、生ワクチンと不活化ワクチンの歴史や株の違いについての説明もあり、大変わかりやすい講演であった。会場からは実用的な質問も含め多くの質疑応答があった。



#### 学術講演会Ⅱ

##### 「食物アレルギー治療における学校医の役割」

日時：平成24年10月2日(火)

講師：獨協医科大学 小児科

准教授 吉原 重美先生

小児のアレルギーの中で食物アレルギーはアレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎に次いで頻度が多い。食物アレルギーは時にアナフィラキシーを起こし、命に関わることがあるため、給食のある保育園や学校では大きな問題となる。保育園医や学校医を

務める我々開業医にとっても重要な問題である。今回は県内で小児アレルギーの第一人者である吉原先生の講演であった。講演には医師ばかりでなく、2市2町の学校教育課の職員や学校関係者も参加した。

今回の講演では成長期の小児の成長を考えて、食べることを目指した必要最低限のアレルギー除去食の提供と定期的な検査(IgE抗体と負荷試験)の実施、耐性をみることが重要との話であった。乳幼児発症の食物アレルギーは耐性化しやすいが、年長児以降や成人発症の食物アレルギーは耐性化しにくいとの話であった。

そして、最後に保険適応となった、アナフィラキシー時に使用するエピペンについての話があった。最近、吉原先生は阿久津博美県医師会常任理事らと県医師会の取り組みとして「アレルギー対応の手引き」などを作成したのでぜひ参照してほしい。



#### 学術講演会Ⅲ

##### 「集団検診に胃がんハイリスク検診を導入して」 「大田原市ABC検診から見た課題」

日時：平成24年11月20日(火)

講師：大田原市保健福祉部健康政策課

成人健康係長 矢野 弥生先生

講師：増山胃腸科クリニック

院長 増山 仁徳先生



今回の講演は胃がんハイリスク検診であるABC検診を導入した先進地の大田原市の行政と医師団から講師の先生をお招きして行われ、医師会員ばかりでなく、行政からも多くの参加者がある注目を集めた講演会であった。

ABC検診は、すでに医師会でも講演を行ったことがあるが、胃がんの主な原因とされているピロリ菌感染の有無と血清ペプシゲンの濃度により4つの



群に分け、それぞれ管理対処法を変えていくやり方で、費用対効果や実施方法などまだ取り組んでいない地区にとっては分かりにくい検診であった。今回の講演で、先進地での取り組みで見えてきた効果と課題は今後の塩谷地区でのABC検診導入に向け大変参考になる内容であった。また、2013年4月からはピロリ菌除菌の保険適用が従来は胃潰瘍や初期の胃がんなどに限定されていたのが、慢性胃炎まで適応拡大されることになり、今後日本全体でピロリ菌が原因となる胃がんの撲滅に向けて弾みがつくものと思われる。

#### 学術講演会Ⅳ

「動脈硬化性疾患予防ガイドライン改訂と最新の脂質治療薬の話題について」

日時：平成25年1月25日(金)

講師：自治医科大学内分代謝科

准教授 野牛 宏晃先生

医師会員の親睦と新年会を兼ねた講演会がさくらのホテル清水荘で行われた。

講演では野牛先生による、動脈硬化性疾患予防ガイドライン改訂の話を中心にわかりやすく説明していただき、講演の後に新年会がなごやかに行われた。



#### 学術講演会Ⅴ

「糖尿病治療に関する新しい話題～CKDへの対応も含めて～」

日時：平成25年2月19日(火)

講師：グリーンクリニック

院長 黒田 久元先生

黒田先生は糖尿病の専門家で過去に何回か糖尿病の最新治療について大変明快でわかりやすい講演をしていただいている。今回は医師会の糖尿病・慢性腎臓病(CKD)研修会の講師として腎障害のある高齢者の糖尿病治療についてわかりやすい講演をしていただいた。



#### かかりつけ医認知症対応力向上研修会開催

栃木県の委託事業であるかかりつけ医認知症対応力向上研修会が11月6日、13日の二日間にわたり行われた。昨年まで講師を務められた小林正樹先生に代わり、今年度から講師は本会副会長の尾形新一郎先生

が務めることになった。

尾形先生、二日間の講演お疲れ様でした。

#### 主治医研修会

「認知症と介護保険：主治医意見書の役割」

日時：平成25年2月14日(木)

講師：認知症介護研究・研修東京センター

センター長 本間 昭先生



今年の主治医研修会は、介護保険の認定で重要な役割を果たす主治医意見書の役割を中心とした講演であった。

#### 新築移転しました(11/26)

西内科医院 新住所 さくら市氏家 3390-5

Tel.028-682-8920



#### 開院しました(12/4)



#### 橋本医院

院長 橋本 敬 先生

矢板市泉 377-5

Tel.0287-43-0406



#### ◆矢板市 野沢外科医院 開院(12/31)

長い間、お疲れ様でした。

橋本医院の橋本克彦先生が平成24年12月3日にご逝去されました。享年73才でした。

橋本先生は矢板市泉地区の医療に従事する傍ら、学校医としても長年勤められ、平成22年11月の第41回保健・学校医大会において日本医師会長表彰を受けられました。

謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## 天然痘と種痘（その1）

現在放送中のNHKの大河ドラマ「八重の桜」に、会津藩主松平容保の正室が天然痘で亡くなる場面や、主人公の山本（新島）八重が子どもたちに種痘を勧める場面があった。物語の筋に直接関係ないこれらの挿話を入れたのは、医療の歴史の重要性が一般にも少しは認識されてきた証なのかもしれない。

天然痘は人類が最も恐れていた伝染病の一つで、日本では痘瘡（とうそう）または疱瘡（ほうそう）とも呼ばれ、古くは続日本記にその流行が記載され、その後たびたび流行を繰り返し、多くの犠牲者を出した。例えば歴代天皇を例にあげると、聖武天皇の天平7年の第一次流行以降江戸期最後の孝明天皇まで81名のうち、実に31名が天然痘に罹患している。孝明天皇の天然痘による崩御が明治維新に影響を及ぼしたように、天然痘の流行は世界の歴史に大きな影響を及ぼしてきたのである。

また、日本では古くから「はしかは命定め、ほうそうは器量定め」などと言われ、天然痘は一命を取りとめても顔に醜い瘢痕（あばた）が残ることが多かった。宇都宮が生んだ寛政三奇人の一人である蒲生君平のあばた顔も天然痘に罹ったためと考えられている。あばたではないが、独眼竜（伊達）正宗も天然痘で左目を失明したと伝えられている。

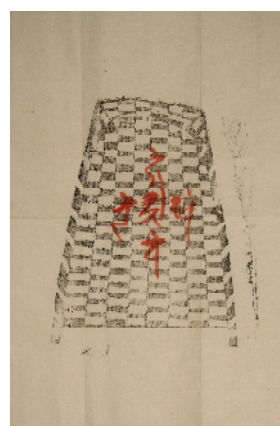
天然痘などの感染症の原因となる病原体の発見はほとんどが二十世紀になってからであり、それ以前の人々は、流行病は悪疫神が起こすものだと信じていた。ましてや治療法もほとんどないこれらの病気を防ぐ方法として神頼みになるのはしかたのないことだったと思われる。修験者の「ほうそう除けの符」や病気が軽く済むようにまじなった「箕加持」、ほうそうを起こす悪疫神を隣村まで追い出す「ほうそう神送り」など様々な民間信仰の資料が日本各地に残されている。

宇都宮の郷土玩具である黄ぶなは病気にかか

った子どもが近くの川で釣れた黄ぶなを食べたら治ったという伝説から明治初期から作り始められたという。



塩谷町道下で江戸後期から明治まで代々医で村役人も務めた青木家には天然痘に関する多くの資料が残されている。その一つが天然痘の症状、治療法、患者記録などを記した「秘方録」である。そこには詳しい症状と現在でも使用する升麻葛根湯や大連翹飲などの漢方薬の処方記載されている。治療の甲斐なく亡くなった小児の症例も書かれており、医師としての無念さが伝わってくる。一方で青木家には天然痘除けの「箕加持」も残されていた。版画刷りの箕に赤くまじないの文字が書かれている。当時は医者さえも神頼みだったことが伺える。（続く）



次回の塩谷医療史は、今回の続きで種痘についての話です。  
（担当：岡一雄）